

「布田保之助坐像」は、熊本博物館と通潤橋史料館に各1点がある⁷。2体とも羽織袴姿で座し、首をやや右斜め前に傾け、右手に筆、左手に紙を持つ。熊本博物館の坐像は、筆が失われている。布田保之助の姿を伝えるものとしては、同じ姿の肖像画も存在する⁸。本像は、布田保之助個人を対象とした顕彰のタイミングに合わせ、明治期から昭和初期頃までの間に制作されたものと考えられる。

「藩公渡り初めの草履」は、細川家藩主の見学に際して使用されたものと伝わる。第4章第2節で記した通り、通潤橋完成後、若殿様の慶



図7-4-3 藩公渡り初めの草履
(熊本市立熊本博物館所蔵)

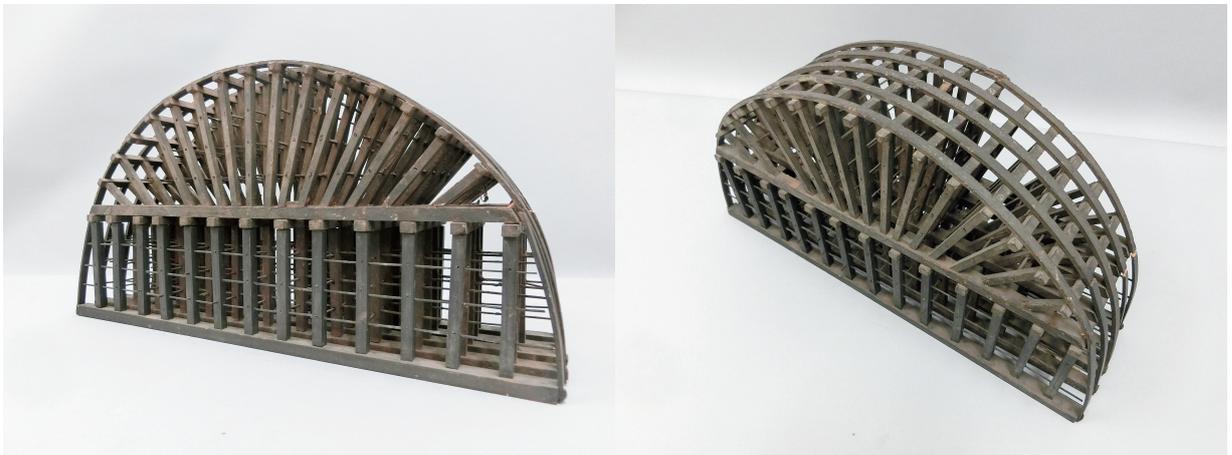


図7-4-4 通潤橋支保工模型 (熊本市立熊本博物館所蔵)



図7-4-5 布田保之助坐像 (左：熊本市立熊本博物館所蔵、右：通潤橋史料館所蔵)

順（のち韶邦）、澄之助（のち護久）、寛五郎（のち護明、その後津軽承烈）の3名のほか、護美も見学したと考えられるが、この当時の藩主斉護については、現時点では確認できていない。なお、藩主を相続するのは韶邦（万延元年（1860））のみであるが、これをもって「藩公」という名称が付された可能性があるかについても判然としない。

5. 小括

通潤橋に関連する豊富な資料が伝来している。特に、古文書史料の「通潤橋仕法書」・「南手新井手記録」は、2点を総合的に検討することで、通潤橋の建造に係る歴史のほか、設計や各種技術導入の過程を詳細に窺い知ることができ重要である。また、支保工の模型などに加え、布田保之助の顕彰に合わせ制作されたと考えられる坐像や細川家ゆかりの品など、多くの関連資料群が残されていると評価できる⁹。

〈註一覧〉

- 1 安達満・林敬・知野泰明・山口祐造 校注・執筆 1997年『川除仕様帳・積方見合帳・治河要録・通潤橋仕法書』日本農書全集65開発と保全2 社団法人農山魚村文化協会
- 2 「南手新井手記録」に掲載される史料群の主な年代は、嘉永5年（1852）～安政年間（1854～1859）が中心で、これ以降のものは、万延元年（1860）、慶応2年（1866）、明治元年（1868）のもので計4点に限られる。
- 3 「南手新井手記録」【33】（通潤地区土地改良区所蔵）元、白石・渡辺家文書
- 4 下田曲水編 1964年『砥用町史』砥用町
- 5 熊本博物館の木山貴満氏のご教示による。また、太田静六編『九州のかたち 眼鏡橋・西欧建築』（西日本新聞社、1979年）に所収されている高田素次「橋本勘五郎小伝」において、昭和30年（1955）の春、著者の勧めにより橋本脩身氏（丈八の孫にあたる）から熊本市立熊本博物館へ寄贈されたと記載されている。
- 6 「南手新井手記録」【21】（前掲）
- 7 布田保之助坐像は、この他、熊本県立矢部高等学校、山都町内個人宅でも所蔵されており、複数作成されている。
- 8 布田保之助の肖像画は、『通潤橋架橋150周年記念誌』（矢部町・通潤地区土地改良区、2004年）に掲載されているほか、白糸台地内の農家宅のほぼ全戸に掲げられているが、原典については未確認である。
- 9 細川家ゆかりの品としては、笹原侘介著『自治之龜鑑 爲政之權化 布田保之助惟暉翁傳』（布田翁遺徳顕彰会、昭和13年（1924年））に、護久・護明・護美の書の写真が掲載されているが、現時点で所蔵先を含めて公開されておらず、調査を行えていないため、本項には記載していないことを断っておく。

〈参考文献〉

- ・熊本博物館 2020年『ひとのすがた、いのりのかたち—肖像彫刻の世界—』令和2年度企画展 重要文化財《木造東陵永興禪師倚像》修復記念